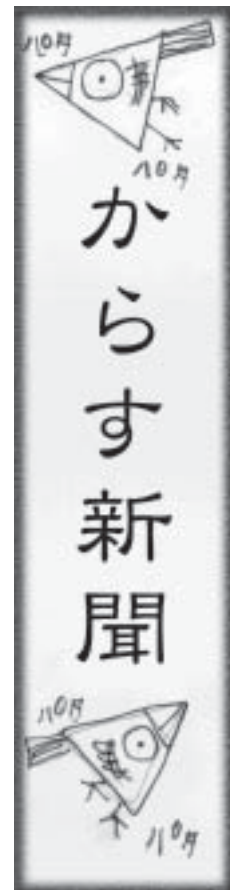


からす新聞の "2005年のマニフェシュト"

- ・ pdf化を直ちに行い、アップロード
- ・ 年間購読者を募集(奨学金制度あり)
- ・ からす新聞ホームページが目を覚ます！！
- ・ からす新聞のロゴを募集



第7巻第1号
通巻第73号

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社

からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

近所に小さな小猫が迷ってきたのはいつのことだったろうか。大型台風が近づいているので何とかしなければ……と界限で一騒動あったのは確かなのであるけれど、昨年はあまりに多くの台風がやってきたので、今となっては、どれの直前だったのか、日付を特定するのは困難である。兎にも角にも、そのちび猫は、近隣住人の助力を得たとはいえず、小さな身体で自然の脅威を乗り越えた。あちらこちらで喰い物にありつく骨を身に付けているようで、その後も痩せ細ることなどまるでない。暫く見かけないな、と気を探んだことがあったけれど、近所の一軒の、正式な飼猫となったそとだすぐに判明した。結構なことである。今日も広場を走り回り、鳥を追い回し、木の芽を齧り、梅の木に駆け上がり駆け下り、忙しい毎日を送っている。

御存知の方もあろうけれど、我が家にも猫がいる。その名はなな。医師の指導に従って低カロリー（低糖質）の食事に切り替えた甲斐があり、嘗てほどのヴォリュームではないが、それでも、どの誰が見ても、一目で認定できるほどにはぶであり、なかなかの貴族。姐御風を吹かせて、広場を申し歩いていた、つい先日までは。独占状態だったところにちび公という余所者が登場したわけで、これが、人間であれば、抗争乃至は訴訟騒ぎになるのが当たり前だろう。

か。けれども、猫は本来争いを好まない生き物である。さて、どうなることかと、興味深く見守った。

なな姐さん、ちび公が辺りをちよろちよろするのが、明らかに気に喰わない様子である。しかしながら、相手は小猫。大きさにして、自分の四分の一ほどしかない。さすがに、追い回して、広場から追放しようなどという風ではない。それでも、ちび公が一定の距離以内に接近してくるとアオウーと威嚇する。本来なら、ここで喧嘩になるか、先方が退散するか、どちらかで決着をみる筈なのだが、そうはならない。ちび公くんは、遊び相手がみつかったとばかりに、ますます近づいてくるのである。背中を丸め、毛を逆立て、尻尾を膨らませて、アオウーアオウーと甲高く声を上げ、斜に睨め付けるなな姐さん。しかし、ちび公はその意を解せず、どんどん近づいてくる。姐御は、飛び掛かる勢いを見せて、爪を出さずに猫パンチ。この段階でもまだ争いを望んではいないのである。ちび公とは言え、一度は逃げるがまた近づいてくる。もっと、遊んでくれ、という表情。再びアオウーと威嚇を試みるが、当然のことながら、甲斐がない。ばかに付ける薬はないやねえ、ああ、いやだ、いやだ、とぼやきながら、なな姐さんの退散と相成った。それでもまだ、ちび公は、遊ぼうぜー、と後を追う。

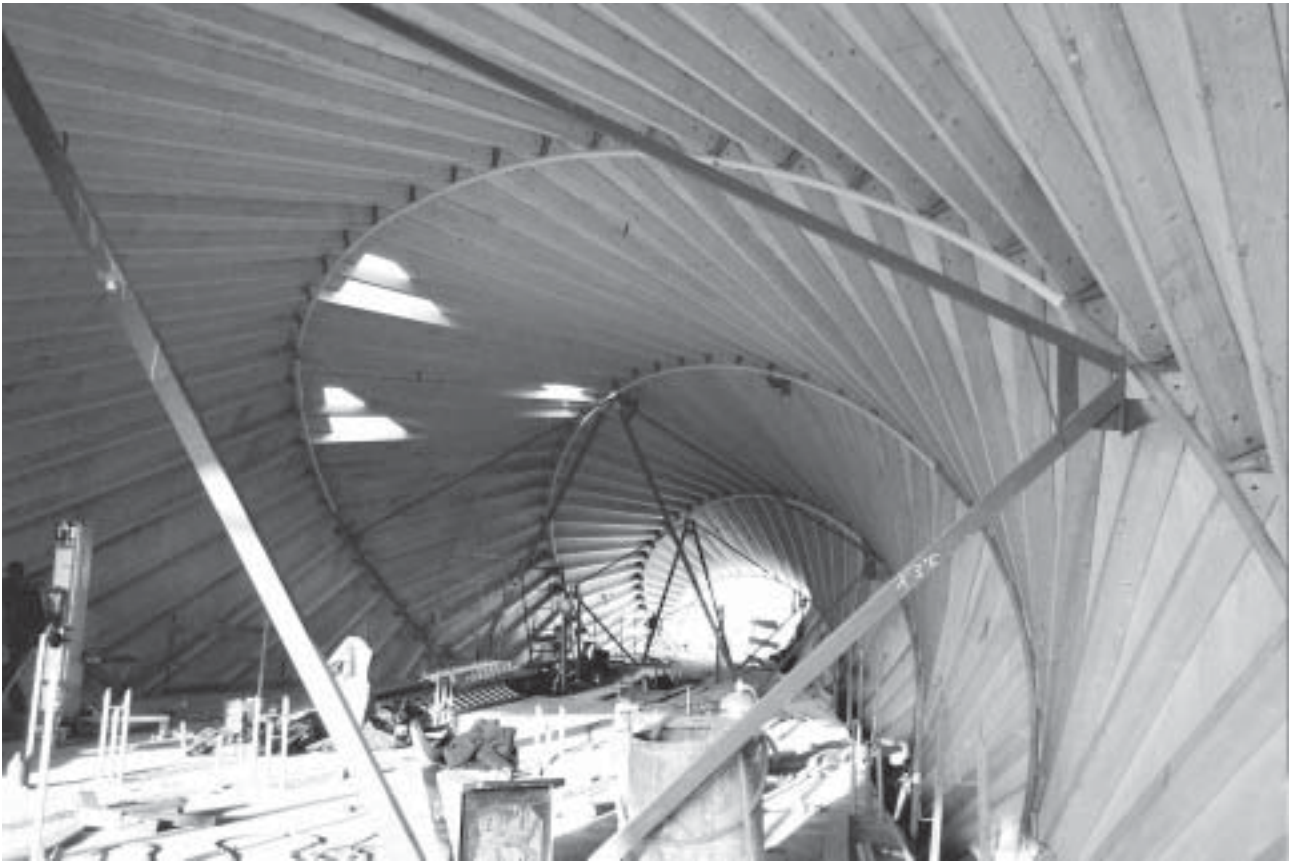
(最終面に続く)

今日の紙面から

- 二面(建築面)
保養施設プロジェクト@スペイン
- 三面(からすライブラリー)
CD『やがて記憶の景色』
- 本 『シュガー・ベイブ、SONGS』
- ライプ、ゴードン・マシュー・サマー
- 四・五面 書初
- 六面(国際アート面)
ロンドンレポーター
- 七面(語面)
ツナーミ



からす新聞は×××××
が母体となつて、世界に文
化と芸術を発信すべく発行
しています。
誰でも自由に参加できま
す(無茶じゃない範囲で)。



現場では、建物建設のクライマックスに入っている。これまで、全長70メートルの建築を、15の基準軸で支持していた仮設のサポートの撤去作業が進んでいる。柔らかい、貝殻のような外殻構造のストラクチャーを、内側から支えていた鉄の柱は、この建築をつくる上でどうしても必要な、型材であり建設の踏み台のようなものであった。それを取外すということは、これまでの施工で何らかの問題があれば、最悪の場合、建物が潰れてしまうということだ。

だから、このジャッキダウンとよく呼ばれる作業は、丁寧に、慎重にも慎重を重ねて行う。サポートを除去する手順を明確にし、ひとつのサポートを取り去っては変位を測定する。変位に異常が認められれば、すぐに作業を中止し、対策をとる。このような指示があるのだ。

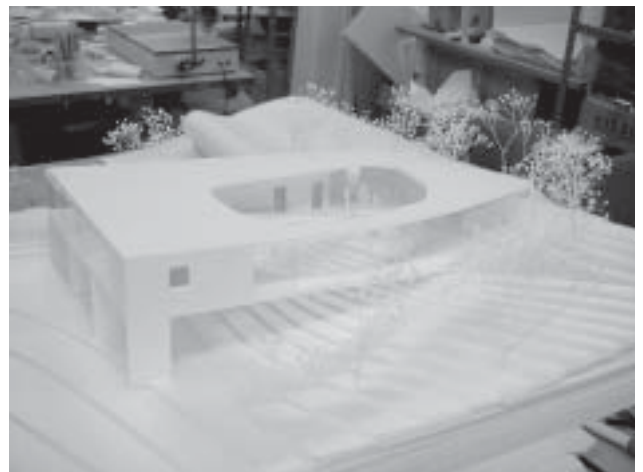
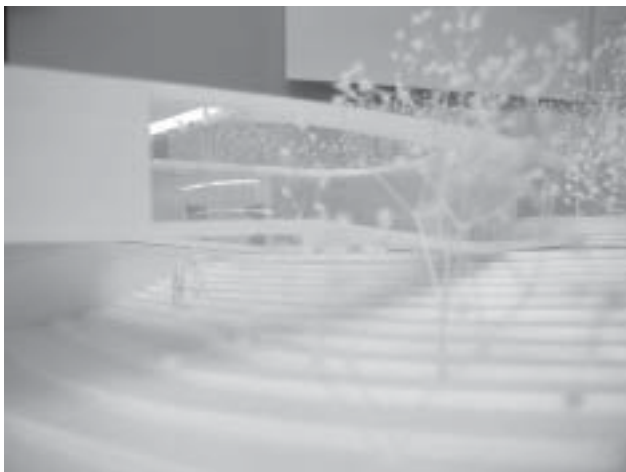
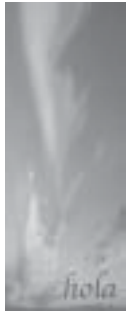
でも、彼らは、一日めに半分のサポートを取っちまっつて、二日目に残りの半分を取った！二日目の夜中に、はじめて報告してきやがった!!

ナンテトコロダ、スペインテノハ。

建物は、現状、何とかかたちをとどめている。変位も予想の範囲内と言われている。いまのところ。

下段写真は、極秘で進行中の、南米はチリの住宅。潜入レポートは、次回以降に乞うご期待。

(篠崎健一)



SONGS

シュガー・ベイブ

east west japan AMCM-4188



SONGS SUGAR BABE



生まれる前のバンドが結構好きだ。ビートルズ、フー、ストーンズも初期(・・・とか思ってしまう)。はっぴいえんど、シュガー・ベイブ、YMO(生まれちゃったか・・・)。自分の知らない世界がある。共感しえない社会性がある。シュガー・ベイブ(山下達郎+大貫妙子+村松邦男+鰐川己久男+野口明彦。後ろ3人は正直知らないが、作曲をするツートップよ、ありえないだろう)、この組み合わせ。プロデューサー(大滝詠一)。ここま

でくると、あれまー出来過ぎた話?か。そんな出来過ぎたメンバーでやられてしまっただけあって、楽曲自体、驚くべき絶妙っぷりなのだ。「ワンダフォー!」心の中で迷わず湧き叫ぶだろう。「サンキュー!!」何故か、感謝せずにいられない。それはきっと、言い尽くせない衝動。とはいえ、彼らをリアルタイムで知らないがゆえにここまで感動するのもかもしれない。肌で触れられないからこそ、魅惑的に見える部分もあるのかもしれない。知りえない世界へのあこがれ。しかし、それでも良いではないか。(と)

やがて記憶の景色

ISBN4-7974-4471-1

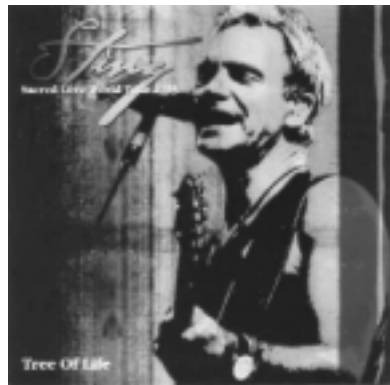
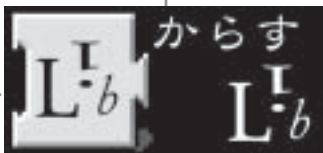
1700 + 税



阿佐ヶ谷団地を撮った写真集が新風舎から出てるのを見つけた。下川良範という多分アマチュア写真家のもので、言葉もなにもなく、ありふれた写真が、ただ淡々と並んでいるだけで、写真集としては少し物足りなさも感じますが、阿佐ヶ谷団地の、普通の日の普通の風景がきれいに撮れています。

ノビルやタンポポ、クローバーの原っぱ、木登りにちょうどいい木、上手い具合に群れた草花や植え込み、古いベンチ。どれも、住む人と長い年月が作り上げて来た味わいで、このどかさ、なくしてしまつたら二度とは返らない。今はもうないすべり台も写っていました。いずれ建て替える運命だとしても、この美しい景色よいつまでも、と、私も、私の子どもたちも願っています。

(長井理佳)



ちよっと息は切れても・・・

若かりし頃、ステージ衣装が黄色と黒色のストライプシャツを愛用していた事から、蜂の針という渾名を持つ本名：ゴードン・マシュー・サムナー、4年ぶりの日本公演に運良く出掛ける事が出来た。78年から83年までのバンド活動、年数で見るとたった5年だが思春期の筆者をしびれさせるには充分過ぎるエナジーを全世界に向けてから名前を見知った者も多いだろう。

51年生まれなので、前半世紀を数えるわけだが、前回の来日やバンド活動していた頃からすると、ステージ上で息が切れているのが見てとれる。だが、しかし、ステージ上の舞台装置、演出、アレンジ、どれを取ってもかなり高いレベルの範囲でハイグレードだった。全体はいつも通りブルーの照明を基調に、パツクには高解像度の巨大な液晶スクリーンを吊しビデオクリップを映写。当然ながらクリップもカッチョイイの一言。問題は、アレンジが高度過ぎてよほど聞き込んでいないと、イントロだけでは何の曲が始まっているのか解らないお客ばかりだった事だ。お気に入りの曲が始まった瞬間に自分だけ盛り上がり過ぎていて、周りが静まり返っているという状況は寂しい事この上ない。(小張寅僧)

初心

彩乃

心臓に植毛

と

蹴球は

裏切らない

と

千一 金獲

にかつぽんせいいち

恒例 書き初め大会

津波

望月

輪

金太

五重塔

しんごう

ろんどん つうしん
London Report

だから母ちゃんは

久しぶりにやってしまった、朝寝坊。と言うよりも昼過ぎに起きたので、ただの寝坊なのか。それも「はっ」と気が付いたら寝過ごしていったと言う寝坊ではなく、何となく起きてはいるのだけれど、布団の中でウトウトしている内に昼過ぎになってしまったというもの。「いつもこの事だ」と言う弥次はひとまず置いておくとして、こんな風に始まった一日は何となくだらけてしまう。まあ、冬休み中だしお正月気分でもないと思うのだが、そろそろもう少し行動的にシヤキツとしたい所。それにしても何だかすつきりしない。顔を洗って、着替えをし、遅めの昼食の為に近所のスーパーまで買い物へと外に出た。すると天気まで良くない。よく言われている、天気の良いイギリスを想像してもらえれば丁度いいのだろうか。空はどんよりと曇り、少し寒くて湿気もある。気分を変える意味でもの外出だったのだが、こうなるとそれはもう、その

すつきりしない気分には拍車をかけるだけで、何も助けにならない。普段は余り天気の悪い時でも気にならないのだが、その時は気になった。「えー、天気までわるいでやんの」そんな感じ。と同時に、ここに来て初めてイギリスの冬が嫌いだと言っている人達の気持ちが分かったような気がした。かの文豪のように中には鬱になってしまふ人もいるぐらいだから、なかなか侮れない。この冬に悩まされる人達は、もつと頻繁にこんな気持ちを感じているのだろうか。そんな事を思いながら、余り調理をしなくていい物を選んで買い物を済ませ家に帰った。

昼ご飯を食べた後でも、大した変化もなく気分は変わらない。そこに胃が満たされてしまったものだから、今度は眠くなってしまった。少しぐらいいは眠気と闘ってみたのだが負けて、ウトウトと始めた所でソファで横になる。二三分、心地よい時間を味わった辺りで聞こえる声。いやいやいやいや。「いくら何でもそれはまずい！」と思ったのと声に出したのは同時だったのか。と

(神山朝人)

あなたの子どもは大丈夫？

あなたの平穏な生活を脅かすストーカーを本場米国で培った最新の技術と装備を駆使して退治します。
あなた一人で悩まないでください。

ストーカー バスター

相談無料
秘密厳守

防犯用品販売・
防犯対策指導も
致します。

tora@pda.co.jp

4-3-49-1, Suginami-ku,

Tokyo 166-0015, JAPAN

voice : +81-5347-9063

facsimile : +81-5347-9064

produced by

P.D.Agency

ツナーミ

検索サイトに「TSUNAMI、カラオケ」と入れた。去年のクリスマスまでなら、サザンオールスターズの例の大ヒット曲に関係することばかりが出てきたと思うが、スマトラ沖大地震のあった翌26日以降は事情が違っている。ツナーミとケラオーキ。ふたつの言葉には「外国語になった日本語」という共通点があったのである。

ご承知の通り日本語には外来語があふれていて、日本語ほど外国語からの借用に躊躇のない言語は他に類を見ないと言われている。それでは、外国語に日本語を出自とする言葉はどのくらいあるのだろうか。

近いだけあって中国語や韓国語にはかなり多いようだが、それ以外の国では大した数ではない。全世界でとなると、勝手にベスト3を選ぶならスシ、カラオケ、ジュードあたりか。カラオケなどは比較的新しいが、要するに日本で発明された日本文化の国際認知度を測るかのような名詞群なのである。

それを考えると「ツナミ」はちょっと異色。地球上いろんな場所で起こってきたはずなのに、今や英語を始めとしてほぼ世界中で採用されている。フランス語やドイツ語でも ^{ツナーミ}tsunami (理由は定かではないが男性名詞)。ロシア語でも ^{ツナーミ}tsunami。中国語には本来海鳴りを意味する「海嘯」、韓国語には「海溢」があるが、ツナミも通用する。韓国での今回の津波報道では「ヘイル(スナミ)」と表記されたようだ(もちろんハングルで)。ヨン様だって公式ホームページで「HELP! Tsunami victims in South Asia」って呼びかけてる。

自然現象を表す英語としては ^{タイフーン}typhoon もあるが、これは中国語から。しかも同じ気象現象を大西洋では ^{ハリケーン}hurricane、インド洋では ^{サイクロン}cyclone と呼んでいて、世界共通という意味で tsunami には及ばない。

それではいつごろから欧米でもこの日本語が流通し始めたのだろうか。

事の起こりは終戦直後のハワイにあったようだ。1946年4月、太平洋最北端アリューシャン列島で大地震。津波はハワイにまで到達し、死者多数。惨状を目の当たりにした日系人たちは口々に「tsunami!」と絶叫。49年、米政府は「Pacific Tsunami Warning Center(太平洋津波警報センター)」をハワイに設立。この年がtsunamiが公式に英語になった記念すべき年ということになりそう。その後63年には学術用語として国際的に公式採用された。

「津波センター」はホームページでtsunamiを使用するに至った、と言うより使用せざるを得なかった理由をこう説明している。

"Tsunami" is the Japanese term meaning wave in the harbor. As such it is most descriptive of the observed phenomenon frequently referred to as tidal wave or seismic sea wave, with both of these terms having misleading connotations with respect to the mechanism of generation.

「ツナーミ」は「港(津)の波」を意味する日本語である。同じ現象を観測したときに最もよく使われてきたのは、tidal wave や seismic sea wave だったが、こちらも発生のメカニズムに関して誤解を生む可能性があった。

前者の直訳は「潮の波」。tidalは「潮の満ち干」を表すtide から来ていて、地震などによる突発的な大波を言うには本来ふさわしくない。後者は「地震による海の波」でなんだか良さそうなのだが、実は地域的な津波は、海底の地滑りや火山噴火によって引き起こされるのがほとんどなので、こちらも却下。そこで日系人や戦時中の軍人たちによって広く太平洋地域での認知を得ていた tsunami ということになったようだ。

こうして tsunami は英語になった。複数形は tsunamis。派生語だってある。「センター」は自らの役割を紹介するくだけでこう語る。

... provides warnings for teletsunamis to most countries in the Pacific Basin ...

太平洋地域の大半の国々に遠隔地での津波に関する警告を行う

tele- は「遠い」。「テレツナーミ」で「遠くで起きている津波」。こんな単語知ってるアメリカ人いねえだろうなあ。

最後に日本最初の「津波」について。徳川家康側近による『駿府記』に、1611年の三陸地震で伊達政宗の所領に大きな被害が出たことが記されたのが最初と言われる。入り組んだリアス式海岸の津々浦々に押し寄せたのであろう。ちなみにこのときは「津浪」。その後徐々に定着していくが、表記は「津浪(波)」のほか、「海立」、「震汐」そして中国語と同じ「海嘯」もあって、すべて「ツナミ」と読まれていた。それが明治以降「津波」に収束していったようである。(望月)

団地の小さな広場を舞台にした、この、抗争とも呼べぬ抗争を眺めながら、私は猫同士でも言葉が通じないんだなあ、と、妙な感心をしていた。猫同士が、声をあげ身振り手振りを交えて、相手に真剣に訴えかけても理解されない姿を目にして、猫と私のコミュニケーションがうまくゆかぬのは当然なのだ、とつくづく思う。

猫同士の意思疎通がうまくいかないってさ、あんた、そりゃ、連中には言葉がないからね、などと言う人もいるかもしれない。なるほど、言葉は、私たちのコミュニケーションを大きく助けてくれるものではない。けれども、その一方で、嘘をつくための道具でもあるのである。私も猫同様に争いごとを好まないの、敢えて本名は臥すが、例えば、BツシユだのK泉だのH本龍太郎などという連中の、悪辣極まりない詭弁を思い出してくれたまえ。私たち人間を人間たらしめる条件の一つである言葉も、使い手、使い方によって、あのように醜くもなりうるのである。

(一面から続く)

あるものをないと言い、ないものをあると言う。嘘を真実だと言い張り、真実を嘘だと言い張る。あの途轍もない非論理振りをみると、連中は極めてクリエイティブな前衛芸術家なんだと勘違いしてしまいたいそうなくらいだ。多くの国民が見守る中、年がら年百、あのように妄言を吐き続けるなんて、なんて凄いいことなんだろう。もっとも、寧ろ、これは言語能力や想像力の如何というよりは、鉄面皮が否かという問題であろうけれど。

言葉を持った人間が動物より偉いのか劣るのかはわからないけれど、確かなのは、大事なものはいよいよだということである。いくら科学技術が進んでも大量虐殺のための兵器を作るのに使われることがあるのと同様に、言語能力を磨いても嘘をつき他者を騙すために使われることもある。昨年、OECD(経済協力開発機構)のテストで日本の若者の学力が、殊に、読解力と数学的応用力が、どすんと低下しているという結果が出た。あちらこちらで嘆く声、対策を訴える声が挙がって

いる。学力向上を目指すこと、大いに結構である。ただ、忘れてもらいたくないのは、本当に大切なのはその学力をどう使うかということである、ということ。テスト結果の多少の低下を受けて、文部科学省は、学力、学力、ああ、学力、と慌てふためいているようだが、まず、人としての倫理や道徳という力を高めることに専心すべきだろう、いくら学力が向上したって、その能力を、サリンを撒いたり嘘をついたりするために使うのでは元も子もないのだから。もっとも、役人や政治家などという、この国のシステムを動かす側の人間ほど倫理が欠如している現状において、そんなことを望むのは無理なことかもしれないけれど。

正月早々、何とも見苦しい愚痴で失礼。ああ、いやだ、いやだ。

(全太)



Ken-ichi Shinozaki,
architect

Voice: +81-3-3220-0644
Facsimile: +81-3-3220-0640;
e-mail: geta-s@t3.rim.or.jp
篠崎健一アトリエ



万年筆なら dani

<http://danijapan.com/>

プレオープン期間を経て、10月15日グランドオープン!!
「自分の行きたいお店が欲しい」
呑むの好き。人と話すの好き。
酒好きの仲間とともに自分のりそこの飲み屋を作りました。
飲み食いだけでなく、自作の美術品等の展示や、
ミニライブ、ろうどく劇等にもお使いいただけます。

編集後記
からす新聞第七巻一巻(通巻第七十三号)無事、発刊できました。
新聞に限らず、これから新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。
次号発刊予定日は二〇〇五年二月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。

1クラス4人までの少人数制学習塾

ウチノ

中野区本町2-50-12 ドエル中野201号
03-3379-1451

中野坂上駅